



京大広報

No. 596

2004. 12

目次

大学の動き

- 平成17年度大学入学者選抜
大学入試センター試験の実施.....1804
- 事務本部に事務改革推進室など4室を新設...1804
- 京都大学留学フェアの開催.....1804
- 京都大学地域講演会（岐阜講演会）を開催...1805

部局の動き

- 医学部附属病院に新病院整備推進室を設置...1806
- 21世紀COEプログラム「病態解明を目指す
基礎医学研究拠点」で国際シンポジウムを
開催.....1806

栄誉

- 生命科学研究所の柳田充弘教授，竹市雅俊
客員教授が文化功労者に選ばれる.....1807
- 小山勝二理学研究科教授，松沢哲郎霊長類
研究所教授が紫綬褒章を受章.....1809
- 医学教育等関係業務功労者の表彰.....1810

寸言

- 良きパートナー 佐藤友彦.....1811

随想

- 地震予知に思う 名誉教授 原田 誠.....1812

洛書

- 民法とフランス 横山美夏.....1813

話題

- 農学研究科と生存圏研究所が公開講座
「森と木から見える世界」を開催.....1814
- 教育学研究科附属臨床教育実践研究センター
公開講座「ラカンとデカルト」を開催.....1814
- 京都大学未来フォーラム（第6回）を開催...1815
- 生存圏研究所がMUレーダを一般公開.....1815
- 原子炉実験所が第3回「アトムサイエンス
フェア」を開催.....1816

日誌

-1816

訃報

-1817

お知らせ

- 大学文書館平成16年度第2回企画展

- 「総長の肖像画」.....1817
- 「白馬山の家」の冬・春季開設.....1818

編集後記

-1818



大学の動き

平成17年度大学入学者選抜大学入試センター試験の実施

平成17年度大学入学者選抜大学入試センター試験は、平成17年1月15日（土）及び16日（日）の両日に実施される。

このため、本学では1月14日（金）の授業を休止する。

試験の概要は、次のとおりである。

1. 期日及び試験教科

1月15日（土）

外国語，地理歴史，理科，理科，理科

1月16日（日）

国語，数学，数学，公民

2. 試験場及び受験者数

農学部試験場（北部構内）

理学部試験場（北部構内）

法学部・経済学部試験場（本部構内）

工学部試験場（本部構内）

総合人間学部試験場（吉田南構内）

医学部試験場（医学部構内）

薬学部試験場（薬学部構内）

受験者数4,422人

事務本部に事務改革推進室など4室を新設

11月1日付けで事務本部内に4つの室が設置された。総務部総務課，総務部広報課にそれぞれ1室，研究・国際部研究協力課に1室および情報環境部企

画管理課に1室を新設して，これら4室が中心となり中期計画に掲げている事項等の実現にむけて本格的に動き出すことになった。

新設された室名	部課名	担 当 事 務
事務改革推進室	総務部総務課	事務合理化，効率化，事務組織の改革や事務職員の再配置についての企画立案等
全学同窓会準備室	総務部広報課	各学部同窓会，地域同窓会等の情報収集や全学的な同窓会準備に係る連絡調整等
産学官連携推進室	研究・国際部研究協力課	産学官連携に係る企画や産・公・TLO（技術移転機関）との渉外，発明評価委員会，共同・受託研究等
電子事務局推進室	情報環境部企画管理課	電子事務局構想の推進

京都大学留学フェアの開催

京都大学として，学生に海外留学の情報を提供する初のイベント「京都大学留学フェア」が11月2日（火）に百周年時計台記念館において開催された。

本フェアでは，受入留学生に比べて少数にとどまっている日本人学生の派遣を推進するため，本学

の留学プログラム等を紹介した。それに加えて，オーストラリア大使館，中国大使館，ドイツ文化センター，日米教育委員会等，13の各国文化機関・団体の協力を得て，各国の情報やさまざまな留学情報（学部・大学院留学，インターンシップ留学，ボラ

ンティア留学，語学研修）を提供した。

午後から開始されたオリエンテーションでは，尾池和夫総長の挨拶の後，本学の派遣留学の体験者から，"先輩に聞く留学体験談"として実際の留学の様子が語られた。その後，時計台内の各会場では，参加機関が実施するセミナーや，ブースでの相談会が開催され，他大学の学生も含めて約900名の学生の参加があり，海外への留学に対する関心の高さがうかがえるフェアとなった。



留学の様子を語る留学経験者

京都大学地域講演会（岐阜講演会）を開催

京都大学では，恒例の地域講演会を岐阜京都大学同窓会「楽友会」の協力を得て，11月25日（木）夕刻，岐阜市内のホテルにおいて開催した。この講演会は，平成9年の創立百周年を契機として始められたもので，京都大学の更なる情報発信をはかるため，京都市以外の全国各地において毎年開催している事業であり，すでに名古屋，東京などで過去11回開催され，今回で12回目となる。講演会には本学卒業生，一般市民，大学生，高校生ら240名の参加があった。

はじめに，尾池和夫総長から「京都大学の現在」と題して，挨拶及び本学の創立以来百余年の歴史と現状についての説明があった。引き続いて，中辻憲夫再生医科学研究所長・教授が「再生医学と万能細胞（ES細胞）」をテーマに講演を行った。中辻教授は，哺乳類を例に，受精卵の細胞分裂の過程にお

いて内部細胞塊と呼ばれる細胞群から，胎児の体を作るすべての種類の組織臓器が作り出されることを説明された。この細胞塊がおおもとの幹細胞であり，この細胞を取り出して一定の条件下で培養することにより，組織臓器になる前の幹細胞のまま保持するというES細胞としての性質を有することをくわしく述べるとともに，ヒトES細胞株の樹立を日本で初めて成功させるまでの苦労話を披露された。また，この細胞が治癒することが難しいとされている疾病に対する医療の中核を担う可能性についても言及された。聴講した学生，一般市民の方々は講演に真剣に聞き入り，講演終了後は参加者から，具体的な疾病への応用や再生医学に対する欧米諸国との倫理観の違いなど熱心な質問が相次ぎ，有意義な講演会となった。



部局の動き

医学部附属病院に新病院整備推進室を設置

本院の老朽化した病棟を再構築し、患者を中心とした診療体制重視の新病院建設を推進するため、病院長直属の「新病院整備推進室」が設置され、10月27日（水）午後5時から金谷史明施設・環境部長をはじめ診療科長等の出席のもとに開所式が行われた。

同推進室には、室長に北徹副病院長が、副室長には宮地良樹教授と久本純夫事務部長がそれぞれ就任し、本院事務部職員（専任・兼任）若干名で構成され、今後、新病棟のハード面のみならず新病院建設に係る基本ソフトなどの実施計画の立案と調整、債務償還計画等の業務を行うこととなっている。

開所式に引き続き、金谷施設・環境部長、北室長、宮地、久本の両副室長による同推進室の看板上掲が行われ、同室員関係者らは、新しい活動の場での決意を新たにした。



看板上掲する左から、久本副室長、宮地副室長、北室長、金谷施設・環境部長

21世紀COEプログラム

「病態解明を目指す基礎医学研究拠点」で国際シンポジウムを開催

医学研究科では、10月28日（木）～30日（土）に亘って、今春竣工した医学部創立百周年記念施設「芝蘭会館」稲盛ホール並びに山内ホールにおいて、国際シンポジウムを開催した。

研究発表は、1人約30分の持ち時間ですべて英語で行われた。第1日目は、午後から始まり10課題、

第2日目は12課題、第3日目の午前中は4課題の合計26課題の口頭発表が行われた。また、第2日目の午後1時～3時まで、山内ホールにおいて74課題のパネル展示も行われた。午後7時から山内ホールにおいてバンケットが催され、和やかな雰囲気の中で、若手研究者間で活発な意見交換が行われた。更に、



講演風景



パネル展示

第3日目の午後は、本プロジェクトに対する外部評価が行われた。なお、参加者は3日間で延べ約600名であった。

今回のシンポジウムには、ハーバード大学、米国立研究所並びにテキサス大学より各2名、シンガポール国立研究所、オーストラリア医学研究所、東京大学並びに大阪大学より各1名を来賓として招き、口頭発表並びに外部評価をお願いした。

外部評価事項は、本計画の目的と必要性、主要研究対象（免疫、癌、老化）と方針、期待される研究成果、また、本プロジェクトの目的の一つに若手研

究者の育成を掲げていることから、教育実施計画（概要、教育の目標、教育目標達成のための方策、期待される効果）更に、平成15年度～16年度上期までの実績（動物実験施設を主体とした研究基盤の構築）、COE特任教員ポストの設置と採用（8プロジェクト）、ポスドクの採用（3名）、RAの採用（32名）、海外派遣（14名）、領域コロキウムの開催状況などに亘って外部評価を受け、概ね好評であった。

（大学院医学研究科）

栄誉

生命科学研究科の柳田充弘教授、竹市雅俊客員教授が文化功労者に選ばれる

生命科学研究科の柳田充弘教授ならびに竹市雅俊客員教授が平成16年度文化功労者に選ばれました。以下に両氏の略歴、業績等を紹介いたします。

柳田充弘教授は、昭和39年東京大学理学部を卒業された後、スイス国ジュネーブ大学、イタリア国ナポリ市国際・遺伝生物物理学研究所、東京大学医科学研究所、米国メリーランド州立大学等、一連の高い水準の研究機関において研鑽を積まれた。その後、同46年京都大学理学部助教授に着任、同53年教授に昇任された。平成7年大学院理学研究科に配置換後、同11年新設された京都大学大学院生命科学研究科に配置換となった。また国立遺伝学研究所細胞遺伝研究系教授、東北大学医学部講師を併任された。柳田教授は、独立研究科である本学生命科学研究科の創設に多大な貢献をされ、平成13年度より2年間研究科長としても本研究科のリーダーシップをとられた。

柳田教授は、真核生物の細胞周期制御機構、とりわけ染色体分配機構の解明に焦点を絞った研究を行



ない、多くの優れた業績を残された。このテーマで研究を始められた1970年代に、研究材料として分裂酵母にいち早く注目された慧眼が、後の研究の飛躍的な発展に通じた。先駆的な解析技術を自ら開発・駆使し、遺伝学、分子生物学、生化学、細胞生物学等の複合的な視野から精力的な解析を行ない、真核生物の染色体分配に関わる数多くの因子を新規に同定された。またこれらの因子群が酵母のみならず、真核生物全体の染色体研究においても重要な鍵であることを示し、世界中の研究者の注目を集めた。実際、柳田教授自身近年になって、酵母で同定した遺伝子について、ヒトにおける相同遺伝子を分離解析し、これらの遺伝子機能の普遍性についてヒト細胞を用いた解析を進めている。こうした一連の研究結果から、分子レベルでは理解し得なかった染色体の動態が、今日我々が理解するまでに明らかになった過程には、同教授の貢献が大であることは世界中の研究者が等しく認めるところである。

学会等の活動では、平成11年より同13年まで日本分子生物学会会長を務められる等、国内の学会諸委員を歴任された。またいくつもの国際学会を主宰し、学内外、国内外における教育研究、研究交流に多大な貢献をされてきた。また、国内学会のみならず、平成7年ヨーロッパ分子生物学機構(EMBO)外国人会員、同12年英国王立協会外国人会員等、海外の研究機構の外国人会員として選出されておられる。

以上のような同教授の貢献に対して、国内からの

評価として平成12年東レ科学技術賞、同13年朝日賞、同14年上原賞、同14年紫綬褒章、同15年日本学士院賞、恩賜賞が授与された。

以上のように、同教授の研究者、教育者としての多大なる功績が評価され、文化功労賞者として顕彰されたことは、誠に喜ばしい限りであり、お祝い申し上げます次第である。

(大学院生命科学研究科)

竹市雅俊客員教授は、昭和41年名古屋大学理学部生物学科卒業、同45年京都大学理学部助手となり、同61年同教授に就任後、平成7年大学院理学研究科に配置換、そして同11年同大学大学院生命科学研究科の創設に際し細胞認識学分野の教授に就任された。その後、平成14年からは生命科学研究科分子病態学分野(連携講座)に就任され現在に至っている。この間、平成5年から7年間、京都大学理学部附属分子発生生物学研究センター長を併任、同12年より特殊法人理化学研究所(平成15年10月独立行政法人に移行)発生・再生科学総合研究センター長を兼務され、そして同14年より研究の拠点を同センター内に置かれている。

竹市客員教授は、長年にわたり動物細胞間の接着・認識機構の研究を行い、この分野において国際的に常に先導的な役割を果たされている。動物の細胞は互いに接着し多細胞体を構築している。竹市客員教授は、細胞どうしの接着のために2種類の機構(カルシウム依存性機構とカルシウム非依存性機構)が存在することを見出されたのみならず、カルシウム依存性細胞接着の実体であるカドヘリン接着分子ファミリーを発見された。そしてカドヘリンは細胞間接着のために必須であると同時に、選択的な細胞認識の担い手でもあり、多細胞体制の形成・維



持に極めて重要な役割を果たすことを明らかにされた。カドヘリンの機能は種々の細胞質因子によって制御されており、カドヘリンの発現レベルや機能制御の異常がガン細胞の転移に関与することから、発生生物学のみならず医学分野からも多くの注目を集めている。また、最近ではカドヘリンが神経細胞シナプスに存在することを証明され、神経回路形成の分子機構の解明に向かって研究を展開されておられる。これらの成果は、生命科学の各分野に大きな影響を与え、国内外において高い評価を受けている。

これらの業績に対し、平成13年国際発生生物学会ロス・ハリソン賞を含む数々の国内外の賞を授与され、同10年には日本学士院会員に選出された。また、日本発生生物学会会長や国際発生生物学会大会委員長を歴任され、学会活動にリーダーシップを発揮されている。この度、カドヘリン研究の輝かしい業績と発生生物学に関する教育啓蒙活動に対する功績が評価され、文化功労者として顕彰されたことは誠に喜ばしいことである。

(大学院生命科学研究科)

小山勝二理学研究科教授，松沢哲郎霊長類研究所教授が紫綬褒章を受章

このたび，我が国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより，小山勝二理学研究科教授，松沢哲郎霊長類研究所教授が平成16年11月3日に紫綬褒章を受章された。

以下に両教授の略歴，業績等を紹介します。

小山勝二教授は，昭和43年に京都大学理学部を卒業，同48年に博士課程を単位取得退学，同51年11月に理学博士の学位を授与された。その後，昭和50年東京大学宇宙航空研究所助手，同56年文部省宇宙科学研究所助手，同62年宇宙科学研究所助教授，同63年名古屋大学理学部助教授を経て，平成3年京都大学理学部教授に就任，同7年京都大学大学院理学研究科に配置換，現在に至っている。

小山教授は一貫してX線を用いた宇宙物理学研究とその発展に尽力され，現在日本がこの分野において世界をリードする地位を築くのに多大なる貢献をされた。日本の全てのX線天文衛星の開発，観測立案，解析と全ての面で多大な業績がある。まず，日本初のX線衛星「はくちょう」に参加，X線突発天体の観測を手掛ける。二番目の「てんま」衛星では，世界初の蛍光比例計数管の開発で中心的な役割を担い，三番目の「ぎんが」衛星での観測も加え，銀河中心付近に大量の鉄を含む高温プラズマを発見，一万年前に大きな爆発現象があったことをつきとめた。四番目の「あすか」衛星を用いて超新星残骸 SN1006 および RXJ1713.7-3946 を観測，強いシンクロトロン放射を発見，宇宙線と同様の超高エネルギー電子が超新星残骸で加速していることを確立された。

平成6年から日本学術会議天文学研究連絡委員会委員，平成11年から12年まで日本天文学会副理事長，平成12年から日本学術会議宇宙空間研究連絡委員会委員，さらに同物理学研究連絡委員会委員などを歴任され，日本の宇宙科学と物理学に貢献されている。また，文部省学術国際局学術審議会専門委員などの学術行政，京都賞基礎科学部門専門委員など財団の委員を幅広く歴任されている。加えて欧州宇宙機構



XEUS 衛星科学委員，米国 Chandra X 線衛星利用者諮問員など国際的に重要な宇宙科学分野の決定機関の委員に任じられている。学内教育では物理第2教室主任，理学部教務委員長，平成15年より21世紀COE 研究拠点形成プログラム「物理学の多様性と普遍性の探求拠点」の代表を務められている。京大での通常の講義に加え，海外を含む20箇所近くの大学研究機関での特別講義，9回の一般講演会を行われ，学外および社会教育でも大きな貢献をされている。

これら一連の業績が高く評価され，昭和56年に朝日賞，平成7年に井上學術賞，平成11年に日本天文学会林忠四郎賞，平成12年に日本天文学会欧文論文賞，平成14年に仁科記念賞を受賞された。これらに続き今回の紫綬褒章受章は，まことに喜ばしいことである。

(大学院理学研究科)



松沢哲郎教授は、昭和49年京都大学文学部哲学科を卒業、同大学大学院文学研究科に進学、同51年12月に博士課程を中途退学して京都大学霊長類研究所助手、同62年助教授となった。平成5年に新設された思考言語分野の初代教授に昇任し、現在に至っている。大学院理学研究科生物科学専攻の協力講座として霊長類学系思考言語分科を担当し、大学院生の教育、後進の研究者の育成に努力されている。平成7年度から文部科学省の特別推進研究の研究代表者として、チンパンジーを主とした霊長類の比較認知的科学研究を継続している。また、平成15年度末に始まった、独立行政法人日本学術振興会の先端研究拠点事業の第1号として採択された「人間の進化の霊長類的起源（HOPE事業）」の日本側代表として、ドイツのマックスプランク進化人類学研究所と京都大学霊長類研究所の共同研究を推進している。またこの間、日本赤ちゃん学会理事、日本動物心理学会理事、日本霊長類学会理事などを歴任し、日本の学術研究の発展にも大きく寄与してこられた。



松沢教授は、文字や数字などの視覚シンボルを利用し、コンピュータを介した実験場面で、ヒトとチンパンジーの認知機能や思考過程を同じ装置で同じ手続きで比較する研究方法を確立し、今日「比較認知科学」と称される、人間の心の進化的基盤を探る

研究分野を開拓した。主要な研究パートナーであるチンパンジーの名前を冠して「アイ・プロジェクト」と称されるようになった一連の研究は、昭和53年以来継続して四半世紀を超えている。昭和60年にネイチャー誌に掲載された論文で、チンパンジーがアラビア数字を使って数の概念を表現できることを初めて明らかにした。一方、西アフリカのボソウ・ニンバの野生チンパンジーの調査から、道具使用にみる学習臨界期や文化の存在を明らかにした。アフリカにおける野外研究と日本における実験的研究の双方を並行して進めるというユニークな研究手法で、知識や技術の習得とその世代間伝播を中心として、親子関係や教育の進化的基盤について研究を進めている。

これら一連の業績が高く評価され、平成3年には秩父宮記念学術賞、8年には中山賞特別賞ならびに第32回ノーベル・コンファレンス講演者、9年には日本心理学会研究奨励賞、平成13年にはジェーン・グドール賞、平成16年には中日文化賞と日本神経科学学会時実利彦記念賞など国内外の賞を受賞されている。これらに続いての今回の紫綬褒章受章は、まことに喜ばしいことである。

なお、関連の研究活動の詳細に関しては、下記の研究所ホームページを参照ください。

<http://www.pri.kyoto-u.ac.jp/>

(霊長類研究所)

医学教育等関係業務功労者の表彰

久保 昌博技術職員（医学部附属病院主任診療放射線技師）は、医学に関する患者診療に係る補助的業務に関して顕著な功労があったことにより、11月22日文部科学大臣より平成16年度医学教育等関係



業務功労者の表彰を受けられた。

(医学部附属病院)

寸言

良きパートナー

佐藤 友彦



昭和37年京都大学を卒業し三菱重工に入社して以来、専らガスタービンの研究開発に従事してきた。当初シンプルサイクル他、再生サイクル、2軸ガスタービン等の開発を手掛けたが、コンバインドサイクルの将来性に魅力を感じ、高温ガスタービンの開発にいち早く着手した。一般に高温部と呼ばれる部位は燃焼器とタービンであるが、高温化するにつれてこれらの設計は急激に難しくなるので、それに対応する多岐に亘る専門技術者の育成と研究開発が必要であった。苦節30年、世界一流のガスタービンを作り上げる事が出来たが、勝因は、途切れることなく新機種の開発を続けたことと、それを支える技術革新を弛まなく推進したことであるが、全ての分野で精鋭のエンジニアが育ち、彼らの横の連携が素晴らしく良かったことが、成功の鍵であったと思う。‘ものづくり’は‘人づくり’からとつくづく感じる次第である。

三菱重工の常務を退任後、暖めてきたゴルフクラブの設計に本格的に取り組んだ。ドライバーでボールを遠くに飛ばすことはゴルファーの夢であり、その為のボールの打ち方或いは新製品と称する道具が毎日のようにゴルフ誌上を賑わしている。しかし、スイング理論とクラブの設計を同時に議論しているものは全く無く、トーダウンとトーインを考慮した独自の設計に取り組む事にした。鋭い感性をもつクラブ設計家の佐想氏と我がガスタービンOBチームが一緒になり理論と試行を繰り返した。実証はスイングを知り尽くした現役のシニアプロにお願いし、歪みゲージを貼り付けたクラブで実際にボールを打って貰い、シャフトのしなりとヘッドの動きの関係を確かめ設計に反映した。空力形状がスイング時のヘッドの安定性に影響する事も実証経験から生まれたものである。人の腕前と力学のマッチングと云う不可解な世界の中で苦戦したものの、完成したク

ラブは Dr. Sato モデルと命名され、2004年ゴルフクラブドライバー部門でグランプリを受賞した。良きパートナーに恵まれた御蔭である。

さて、早島町にいる同級生から三位一体の改革に揺れる早島町の舵取りをするよう要請されたのは昨年の暮れであった。適当に聞き流していたのだが今年になって真剣みが加わり、現町長が任期満了で退陣するかもしれないので早く決断せよ、という説得に負けて6月中旬受諾することにした。その時は役場のオペレーションの事しか頭に無かったのだが、いきなり選挙という全く未知の世界に踏み込む羽目になった。何から始めて良いのか見当もつかないまま地元の人達と子供時代の悪戯鬼に頼み、後援会を作ってもらい、選挙対策本部が発足した。後援会会長は親戚の大佐藤の孝之さん、事務局長は子供時代の陸上競技のスター選手であった高橋恒ちゃんが就任し、土建屋の日笠、原のせいちゃん、長崎健くん、が事務を執ってくれた。連日の猛暑の中、続々と集まってくれた同級生諸君の御蔭で激戦を勝ち抜くことが出来た。戦いが終わって、モリくんが泣いた、のら建が笑った、ノリちゃんも留美ちゃんも興奮した。皆で作上げた町長だから一緒になって頑張れば、新しい時代の新しい早島町、を作り上げる事が出来ると皆が信じている。これが郷土愛なのだと思いき知らされた。

今回は行政という更に分かり難い世界に飛び込んだわけだが、400年の歴史を持つ小さな町を、現在の日本に通用する町に再構築し自立自立たせる事が、三位一体の改革の中で可能なのか、私にとっては新たな挑戦であり、後の無い最終レースである。再び良きパートナーを得て、京都大学時代に培った不撓不屈の精神でこの難局を乗り切らねばならないと考えている次第である。

(さとう ともひこ 岡山県早島町長 昭和37年工学部卒業)

随想

地震予知に思う

名誉教授 原田 誠

地震防災にかかわる関心が高まっている矢先、また新潟中越地震が起きました。国の地震調査研究推進本部から、「琵琶湖西岸断層帯において、今後30年間以内に、0.09~9%の高い確率で、最大マグニチュード7.8程度の地震が発生すると推定される」という見解が示され、局地の震度まで予測されています。また、発生確率の高い東南海・南海地震についても「地震予知計画」という国家プロジェクトのもとで、検討がなされています。このような背景から、地域の防災組織の充実が求められ、大津市に住む門外漢の一市民として、これにすこし関わり、予知問題について考える機会をもちました。



予知は長・中期予知と短期予知に分類され、何時・何処で・どの程度の地震が起こるかを決定する問題です。地殻変動の観測網が強化され、多面的な実験と地殻変動の理論が進展して、ここ10年程度の間プレートに固着帯(アスペリティ)の存在とその動的挙動等々が明らかになり、これらは長中期的な予測に寄与すると言われていたようです。一方、地震は本来カオティックな性質をもち、臨界状態を経て破局を迎える現象はフラクタル的であるから、決定論としての予測が出来ないという見方もあるようです。Nature誌は、1999年、"Is the reliable prediction of individual earthquakes a realistic scientific goal?"という命題で、公開debateを企画しました。これによると短期予知は大変困難なようです。短期予知は社会問題、長・中期予知は学術的な問題に密接に関係するように思います。学術成果の社会への還元が叫ばれる中で、予知問題の学術的な現況と問題点を一般の社会に知らせていただくと、地域の防災組織を充実する上で大きな助けになるという感想をもった次第です。同時に、多額の予算を伴う大型のプロジェクトが進行しているなかで、偏向のない評価が望まれますが、地震予知研究はその典型的な対

象例になると思います。

社会が強く期待しているのは直前予知であります。これが成功した例はほとんど聞きません。1975年、中国で発生した「海城地震」は、地震の前兆現象の一つである動物の異常挙動など、いわゆる宏観現象を感知して、直前予知に成功した例ですが、宏観現象に頼るアプローチは根拠薄弱な疑似科学と見なされています。しかし、最近では、前兆現象としての電磁波などの異常現象に科学的なメスを入れるという動きもあるようです。「知」自体が変革期を迎え、その再構築が望まれる時代にあって、疑似科学から科学へ脱皮しようとする研究に大いに期待したいところです。

現在推進されている重点四分野(「生命科学」・「情報」・「環境」・「ナノテクノロジーと材料」)への集中投資、産官学連携という名の下で行われている産官学間の融合、経済活性化の先兵としての効率的研究の重視、これらによる大学存立の礎である息の長い基礎研究の弱体化が危惧されております。地震予知の研究は、地核運動に対する観測網の強化から出発し、社会的な強い要請を背景にインフレーションを起こしましたが、最近では転じて地震の起こるメカニズムの探求という基礎的な学術研究に重点が移りつつあるように素人目にはみえます。地震予知研究の歴史は長く、最近の社会情勢のなかで、それがどのように推移するのか、興味の尽きないものがあります。大学における基礎研究の重要性、国家プロジェクトの成否を占う一指標になると思うからです。地震予知が一日も速く達成されることを強く期待しております。

(はらだ まこと 元エネルギー理工学研究所教授
平成11年退官 専門は分子化学工学)

洛書

民法とフランス

横山 美夏

一般にはあまり知られていないことですが、明治期に制定された日本の最初の民法典を起草したのは、ボワソナードというフランス人です。この民法典は、成立直後に、個人主義的に過ぎるなどの批判を浴び、結局施行されませんでした。しかし、その後に行われた新しい民法典の制定作業が、旧民法典の改正という形式をとったこと、現行民法典でもある新しい民法典の起草に際して重要な役割を担った梅謙次郎博士が、フランスに留学していたことなどから、フランス法は、現在の日本の民法に大きな影響を与えています。したがって、フランス法を研究することは、単なる外国法の比較研究にとどまらず、日本民法の意味を深く理解するためにとても大きな意義を有しています。

とはいえ、フランス民法を日本民法に取り入れた際、フランス民法典を支えているものの考え方、言い換えればその精神(esprit)が十分活かされなかったと考えられる部分もないわけではありません。もちろん、何でも外国の真似をする必要はありませんので、日本法が、フランス法の考え方を理解した上で、その考え方を退けることは一つのやり方です。実際、日本民法には、あえてフランス法に従わなかった部分も少なからず見られます。問題は、フランス民法典の条文や法概念を支えている考え方を誤解し、あるいは曲解して、日本に輸入してしまったのではないかと、と思われる部分があることです。

ところで、先日、講演をするために京都を訪れたフランスの大学の先生といっしょに街を歩いていたところ、その先生が一言、ぼつりと言いました。「日本人たちは、建物の内部の空間をあれだけ美しくととのえることができるのに、どうして建物の外、街のなかがかこんなに雑然として調和がとれていないことに我慢できるのでしょうか。」

確かに、日本では、お寺の庭はもちろん、お店などの内部にも、工夫された美しい空間が造られていることが珍しくありません。それに比べて、外に出ると、建物の色や形、高さなど、何の調和もないよ

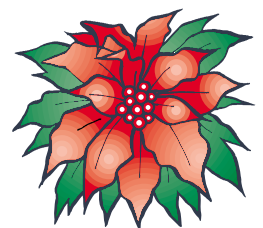
うに見えます。家の内側を美しくできるのですから、決して美的センスが欠落しているわけではないのですが、何がパリの街並みとは比べものにならない日本の街を生み出してしまったのでしょうか。

それにはいろいろな理由があると思いますが、私には、そのひとつとして、日本民法が所有権概念をフランスあるいはヨーロッパから輸入したときに、とくに不動産について、その意味を曲解したのではないかと、現在でもその精神をきちんと理解していないのではないだろうか、という漠然とした疑いをもっています。

実際、フランスでは、建物の屋根の形から壁の色まで、非常に細かい規制があります。そこには、街は国のものでもなく、個人が勝手にできるものでもなく、人々のものである、という考え方があるように思うのです。自分の土地は、自分のものであるが、街の一部であるという意識が、所有権概念を裏から支えていると考えられます。

フランスの所有権概念がどのような精神をもっているのかを解明するのは、容易なことではありませんが、それを明らかにすることは、おそらく、京都を少しでも美しい街にするための、一つの助けになるのではないかと考えています。

(よこやま みか 大学院法学研究科教授)



話題

農学研究科と生存圏研究所が公開講座「森と木から見える世界」を開催

10月16日（土）から17日（日）にかけて、晴れやかな秋空のもと、大学院農学研究科森林科学専攻および生存圏研究所共催による公開講座「森と木から見える世界」が実施された（実行委員長 森本幸裕）。本年度は、マクロからミクロにいたるスケールの異なる視点から森林を眺めることをテーマとし、例年を大きく上回る120名もの一般参加者を集めた。

講義は森林観光、熱帯林、身近な樹木、年輪、細胞壁、木材成分、遺伝子など7つの専門的な視点か



ら提供され、講義の合間には、講師に熱心に質問をする参加者の姿が多く見られた。2日目の午後には体験実習として、下鴨神社の森、大学北部キャンパス、大文字山の樹木ウォッチング3コースと、顕微鏡を用いる木材ウォッチング1コースが実施され（協力 フィールド科学教育研究センター）、公開講座は好評のうちに終了した。

（大学院農学研究科森林科学専攻，生存圏研究所）

教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座「ラカンとデカルト」を開催（21世紀 COE「心の働きの総合的研究教育拠点」共催）

臨床教育実践研究センターでは、毎年、深刻化する教育問題への取り組みの一環として、現代人の心の理解に主眼をおいた公開講座を開催している。

今年は、ラカン派分析家の Peter Widmer センタ

ー客員教授と河合俊雄教授を講師として、10月17日（日）午後1時から、百周年時計台記念館国際交流ホールで開催した。心理臨床専門家、教育関係者や大学院生、学生など約50名が参加し、「ラカンとデ



カルト～ラカンの精神分析はいかにデカルト的か？
～」というテーマのもと、難解ながらもラカンの精神分析とデカルト哲学との対比を通し、人間存在の

根底にまで洞察を深める充実した時間となった。

(大学院教育学研究科)

京都大学未来フォーラム（第6回）を開催

京都大学では、大学と社会との協力・連携を一層深めるため、社会の各界で活躍する卒業生などを迎えて、講演と意見交換を行う京都大学未来フォーラムを、百周年時計台記念館・百周年記念ホールにおいて10月21日（木）夕刻に開催した。

第6回目の今回は、農学部を卒業後、建設省に入省、京都市助役、建設省建設経済局長、国土庁長官官房官房長、国土事務次官などを歴任され、現在は、阪神高速道路公団理事長として活躍されている木下博夫氏を講師に招き、「都市の未来」と題して講演が行われた。



講演では、産業革命以降のヨーロッパにおける都市計画の流れが、人間の行動範囲の変化により生じたものと紹介されるとともに、昭和30年代以降の日本政府が実施する国土計画の流れが、開発中心の計画から人間と自然に配慮した計画に変わっていった内容を紹介された。この中で「都市は生き物、ダイナミックな存在」であり、そこに住む人の考え方が反映されたものが都市ではないか、と述べられた。また、地域の大きさ、地域の持つ伝統的な文化資産や価値、地域に住む人々の考え方、都市を造る方向性などが、都市造りと、都市の未来を展望する際に重要なポイントである。そして、そのことが現在、各地で話題になっている市町村合併などの際に大切な視点であることを、都市の血管とも言える道路計画を作成される立場から京都市を例に取り上げ、参加された方に語られた。

聴講した学生、教職員、一般市民の方々約100名は講演に真剣に聞き入り、講演終了後は参加者から、高速道路を造る際の環境への配慮などについて熱心な質問が相次ぎ、有意義なフォーラムとなった。

生存圏研究所が MU レーダーを一般公開

生存圏研究所は、滋賀県甲賀市信楽町の信楽 MU 観測所で MU レーダー観測を続けている。直径約 100m の円形アレイ・アンテナを備えた周波数 46.5MHz の大型大気観測レーダーである MU レーダーは、1984年の完成以来、これまで20年間にわたって、世界最高性能・アジア域最大の大気レーダーとして全国共同利用に供され、活躍を続けてきた。本研究所では、MU レーダーの完成20周年にあ

たり10月23日(土)、24日(日)の2日間にわたって、「MU レーダー一般公開」を実施した。内容としては、MU レーダー装置をはじめ電波や光



MU レーダーアンテナ面の見学風景

を用いた各種観測装置の見学，気球による気象観測の実演，地球環境問題に貢献するレーダー技術の展示などを行った。来場者は延べ429人にのぼり，秋晴れのもと巨大なアンテナフィールドや種々の観測設備，これまでの研究成果について，みなさん熱心に見学されていた。

(生存圏研究所)



来場者と一緒に気象ゾンデ観測を行いました

原子炉実験所が第3回「アトムサイエンスフェア」を開催

原子炉実験所では，さる10月24日(日)，実験教室，講演会，施設見学を含めた地域広報のための総合的なイベントを「アトムサイエンスフェア」として開催した。このイベントは，子供たちを含めた地域住民の方々に広く科学に興味を持ってもらうため，地元自治体(熊取町，泉佐野市，貝塚市)の教育委員会等の協力を得て開催したもので，今年で3回目と



なる。

内容は，「見てみよう魔法の光」「放射線を見る道具を作る」「わくわく面白実験」という3つのコースに分かれた実験教室と，実験所教授による「私たちの体を作る元素はどこから来たか」というタイトルでの講演が行われた。

特に実験教室は従来放射線に関連するものを実施していたが，今回新たに，放射線とは関係なく，子供たちに理科に興味を持ってもらおうと考えて「わくわく面白実験教室」という教室を開催したところ，家族ぐるみの多数の参加があり，子供たちの手作りの教材を用いた実験の結果に，方方から感嘆の声があがり，大変盛況であった。

今後，多数の方が気軽に参加でき，身近に科学とふれあうことのできる場をどんどん提供して行きたいと考えている。

(原子炉実験所)

日誌 2004.10.1 ~ 10.31

10月1日 同和・人権問題委員会

4日 企画委員会

" 学生部委員会

5日 役員会

" 部局長会議

6日 総長，台湾を訪問(9日まで)

12日 役員会

18日 役員会

19日 教育研究評議会

" 企画委員会

" 教育制度委員会

20日 経営協議会

25日 役員会

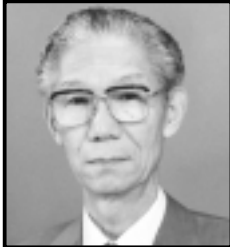
26日 中華人民共和国，Shi Jianjun 南京大学副学長
他3名，総長他と懇談

27日 財務委員会

訃報

このたび、奥田^{おくだ} 六郎^{ろくろう}名誉教授が逝去されました。
ここに謹んで哀悼の意を表します。
以下に同名誉教授の略歴、業績等を紹介いたします。

奥田 六郎 名誉教授



奥田六郎先生は、10月16日
逝去された。享年87。

先生は、昭和17年京都帝国
大学医学部医学科を卒業、同
大学講師、助教授を経て同41
年教授に就任、小児科学講座
を担任された。昭和54年停年により退官され、京都
大学名誉教授の称号を受けられた。

この間、先生は常に教育に邁進され、多くの優秀
な人材を育成されるとともに、腎臓疾患の診療、研

究において優れた研究業績を残された。特に、急性
糸球体腎炎、血管性紫斑病、IgA 腎症などの病態、
組織分類などの成果は、常に学会をリードするもの
であった。

また、昭和53年10月に、新設国立医大第5期校、
福井医科大学副学長（医療担当、病院長）に転じら
れ、その創設の労を執られた（同54年3月まで本学
医学部教授に併任）。同61年に退官され、福井医科
大学名誉教授の称号を受けられた。

（大学院医学研究科）

お知らせ

大学文書館 平成16年度第2回企画展
「総長の肖像画」

大学文書館では、京都大学の歴史を様々な角度から照らし出す企画展を開催しています。

このたび、長尾前総長のご退任記念事業として肖像画が製作されました。また、大学文書館では先日附属図書館より歴代総長の肖像画の移管を受けました。これらのことを記念して総長の肖像画5点を中心とした企画展を開催いたします。

多数のご来場をお待ちしております。

1. 期 間：平成17年1月12日（水）～2月27日（日）
2. 開 館 時 間：9：30～17：00
3. 休 館 日：月曜日
4. 入 館 料：無料
5. 会 場：百周年時計台記念館1階 歴史展示室
6. 問い合わせ先：大学文書館

〒606 - 8501 京都市左京区吉田本町

TEL：753 - 2651 FAX：753 - 2025

E-mail：archiv52@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

「白馬山の家」の冬・春季開設

本学の学生及び教職員の厚生施設として、「白馬山の家」を今年度からは下記の通りスキーシーズン中開設致しますので、たくさんの方のご利用をお待ちしています。

この「山の家」は、中部山岳国立公園白馬山麓の梅池高原にあります。積雪量豊富で初心者から上級者までが楽しめる大きな規模を誇る梅池高原スキー場で、春のゴールデンウィークまでスキーやスノーボードが楽しめる最適な場所です。また、近くには小谷温泉をはじめたくさんの温泉もあります。

建物は山小屋風の木造地上2階地下1階建てで、1階が食堂兼談話室・2階が寝室・地下が浴室、乾燥室となっています。



記

1. 名称：京都大学「白馬山の家」
2. 所在地：長野県北安曇郡小谷村大字千国字柳久保乙869 - 2
(交通機関)
JR大系線「白馬大池駅」下車，松本電鉄バス「梅池高原」下車，徒歩15分
車の場合 長野自動車道 豊科 IC から約1時間30分
北陸自動車道 糸魚川 IC から約50分
3. 開設期間：12月10日(金)～平成17年5月5日(木)
4. 収容人数：26名
5. 所要経費：1人1泊2食 2,600円(冬季は暖房費別途300円)
6. 申込及び問い合わせ先：
体育会事務室(西部構内総合体育館内，電話 学内2574)に照会ください。

編集後記

広報の編集を担当してから2年近くになる。新しいニュースや面白い読み物も投稿されてくるが、毎年の恒例行事の顛末を報告する記事もある。毎年のものであるから発信する価値が低いとは言えないが、出席者の人数とかは変わっていてもその他の文章はほぼ同じ内容である場合も多々あることに気付く。ひどいものになると感想まで同じというのものもある。ここまでくると、価値が低いどころか発信することの意味がなくなる。このような点のチェックはできたかもしれないが、広報を魅力的なものにするという新たな取り組みもできないうちに、任期が終わろうとしている。日常の中に新機軸を出すことはなかなか容易でないことを感じる。

(佐々木記)